細金細工に就いて

文學博士　濱田耕作

一

細金細工とは英語で「フイリグレー」(filigree)と云ひ、佛語で同じく「フイリグレーン」(filigrane)伊語で「フイリグラーナ」(filigrana)と云ふものを指すのであつて、金銀の可伸性を利用して其の細線織粒を以つて織細な細工を裝飾品に試みるものが卽ちそれである。此の「フイリグレー」なる語は拉丁の「フイルム」(filum)卽ち「絲」と、「グラヌム」(granum)卽ち「粒」の兩語の結合したものであるけれども、古くからある語では無く、近代に作られたものである。併し細金細工其者は世界に於いて最も古くから存在する寶飾(ジユウエリー)の技術である。其の分布は古埃及、希臘、エトルリヤなどから歐洲では中世を通じて、ケルト人、其他の邊陲の民族にも及ひ、亞細亞では印度から、支那朝鮮日本にも認められると云ふことは、文化美術の研究者に取つて、最も趣味の深い現象である。又た忽にすることの出來ない研究問題である。然るに從來此等の細工品が支那日本朝鮮などの古墳から發見せられても、たゞ精巧な金銀裝飾品として賞讃の辭を呈するばかりで、其起源や東西の關係などに就いて考察を試みたものは殆ど無かつた樣である。私は朝鮮の古墳を調査して、親ら細金細工の耳飾を發掘してから、此の問題に興味を持ち、多少の研究を試み、既に少しく之に關して述べたことも

あつたが（朝鮮總督府大正七年古蹟調査報告第一册）何分座右に參考す可き書物などが備はらないので、思ふ通りの論證も出來ないのは殘念である。併し今迄調べ得た處を不充分ながら左に記述して、大方學者の敎を乞ひ、之に關する一般の興味を喚起し度いと思ふのである。

二

細金細工（フィリグレー）の技術要領は、金銀の細い柔かな絲を撚糾し、組辯し、其の各の接觸點及び地面との間を金銀の白蠟（シロメ）及び硼砂を以て、吹管の焰によつて結着せしむるにあると云つて宜しい。而して小さい金銀の細粒や小玉を、渦形の處や、交叉點、又は其れ等の中間に附着して、細線細工の愈々美しく飾り上げ、又た稍々粗い線の基礎的細工をして其の內に極く纖細な細工を入れ込むのが、精巧なものに於いて常に見る所である。時には細線の細工を缺き、單に微粒のみを以てする場合にも此の「フィリグレー」なる語を以て呼ぶことはあるが、併し是は寧ろ例外であつて、細線を紐撚して細工をする點に、此の技術の特徵を認む可きである。（以上主として大英百科全書の記事に據る。）

此の樣の技術の作品で最も古いのは矢張り埃及であらう。埃及では紀元前約三千年第十二王朝の頃に既に微粒を主とした細工が存在して居つた。而して其の粒の細かさは一吋の八十分の一に達すると云はれてゐる。卽ちかのド・モルガン氏がダーシュール（Dahshur）で發見した寶飾の中に之を認めることが出來る。第十八王朝に至つては、細線を捩撚した眞の「フィリグレー」細工と稱す可きものも見るに至るのである。此の埃及の例はエトルリヤのものに比べると遠く二千年以前も古いことを注意せねばならない。（ペトリー氏「古埃及の美術と工藝」）

キプルス島のエンコミの古墳（Enkomi）で大英

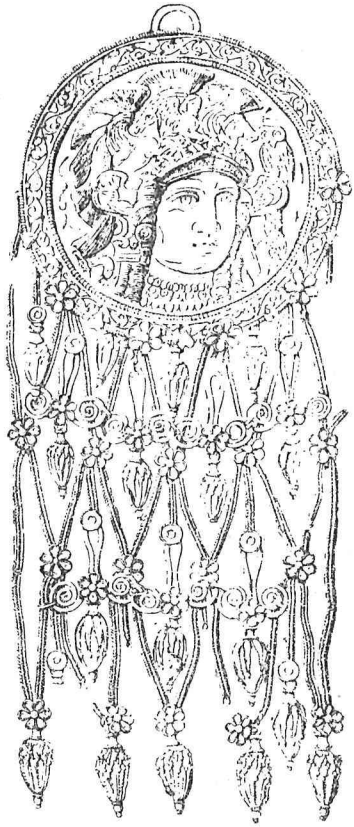
博物館の發掘が發見した遺物にも微粒細工の著しい遺物がある。中にも石榴形をして垂飾は、三角形の模様に仕切り、それに三千以上の粒子を一々鑞著してあると云ふことである。而して是は紀元前約一千年頃の製作であるから、前の埃及の遺品に比しては、稍々新しいが、なほ此様の細工中最も古いものゝ一と云ふ可きである。又たロードス島のカミルス（Camirus）からも、紀元前七百年頃の微粒細工の寶飾が出てゐる。併し此等はエトルリヤの遺品に比して粒子の大きさは粗いと云はねばならない。（ツオルター氏「希臘人の美術」）

三

併し細金細工の最も精妙の域に達したのは、西洋では希臘と伊太利エトルリヤに於ける紀元前第六世紀乃至三世紀の作品に若くは無い。希臘人の遺物も其の本土發見のものには、取り立てゝ云ふ程のものは無いが、却つて黑海の沿岸クリミヤ地方に於ける希臘人の植民地の古墳から最も顯著なる遺物を發見した。就中古へのミレトスの植民地であつたパンチカペウム（Panticapacum）の跡であるケルチ（Kertch）のクール、オバ（Koul Oba）の一古墳から、千八百三十一年に發見した寶飾を以て其の優品とする。其の後ニコポリス（Nicopolis）やブリッニッア（Bliznitza）などの古墳から出たものも之に多く劣らない。今ま此等に就いて精しく叙述する邊は無いが、其の顧顳部の飾物胸飾、頸飾、手釧等に於いて我々は細金細工の絶妙なる技術を發見するので、或者に於いては細線七列を並行せしめたものさへもある。勿論斯る作品は、南露植民地の技術家の手に成つたものでは無く、スキチヤ地方君長の豪華を好む趣好に投じて、雅典の本場で製作輸入せられたものに違ひ無い。（ミンス氏「希臘人とスキチヤ人」等）兎に角此のクリミヤ發見の遺

物は紀元前第四世紀に於ける希臘の細金細工發達の最頂點を誇示するものと云つて差支ない。

伊太利エトルスキ（Etruscans）の寶飾に於ける技術も、亦た希臘人から學んで、之に東方の影響を交へたものに過ぎ無い。而して矢張り人民の華美外飾を愛する趣味から、寶飾の需要の頗る大なるものがあり、希臘の技術家は、此處に來つて其の精妙な作品を殘し或は之を傳へたので、我々は紀元前第四世紀の細金細工の最頂點を南露古墳の



クリミヤ發見寶飾

發見品に認めると同樣、第六世紀第五世紀から第三世紀に至る優品は、之をエトルキスの古墳の遺物に求めることが出來るのみならず、此等發掘品の分量から云つて、エトルスキは古代民族中最も寶飾を愛好し、又た件の細金細工を最も盛に應用したと稱せられるのも無理は無い。

エトルスキの寶飾は到る處の彼等の墳墓から出てゐるが、就中ヴルチ（Vulci）コルネト（Corneto）チェルベテリ（Cerveteri）などから、細金細工の立派なものが發見せられた。此等の作品は古い處では著しく東洋風を發揮し、其の趣味も高尚で無かつたが次いで希臘の影響を受くるに至つて、美術的價値の向上と共に、技術の方面にも非常の發達をした然るに第三世紀以後に至つて、遂に粗惡なる手法

に墮落して行つた經路は美術史上の研究として頗る面白い點であるが、今私の述べようとする目的に直接の關係は無いから、此處には詳しく述べるを避ける。こと（マルタ氏「エトルスキの美術」等）

四

伊太利に於いてエトルスキの間に斯の如く發達した細金細工も、年を經て其技術は全く工匠の間に忘れられて仕舞つた。之を再び此等の間に復活したのは、羅馬の寶飾師カステラーニ（Castellani）である。彼は希臘エトルリヤの寶飾を深く研究し、如何にもして其れと同樣のものを作つて見ようと思つて苦心をしたが、多年の間之を發見することが出來なかつた。然るに終にアペニノ山中聖アンヂェロ・イン・ヴァド（St. Angelo in Vado）の片田舍に此技術を傳へてゐる工匠を發見して、彼は此の細金細工の技術の祕決を知ることが出來

た。即ち千八百六十年十二月二日彼は「アカデミー・ザンスクリプション」に發表した處は、嚮に述べた通り、吹管の焰を以て、金銀の細線微粒を固著した上を熔著せしめるので、それには砒素化合物を用ゐるにある。彼は斯くて其の工匠をナポリに招致して之を學習し、終に千八百七十二年倫敦の大博覽會に倣古の作品を出陳して、賞讃を博するに至つた。（カステラーニの考へでは、細金細工は或る海の貝の形から其の意匠を得來つたものであるとの事である。是は一寸面白い見方である。）併し其の精巧さは到底古への希臘エトルスキのものに及ぶ可くは無かつたことは、彼自身の左の言に徵して明かである。（マルタ氏に據る。）

Nous sommes convaincus que les anciens ont eu quelque procédé chimique que nous ignorons, puisque, malgré tous nos efforts, nous ne sommes pas arrivés á la reproduction de cer-

taines oeuvres p'une exquise finesse, auxquelles nous désespérons d'atteinerd, à moins de nouvelles decouvertes de la science".

斯の如くカステラーニ氏が十九世紀の中頃に至つて、漸くアペニノ山中で探し出した細金細工の技術は、併し伊太利の古代許りで無く南歐ではビザンツ帝國北歐ではサキソン人、ケルト人、ブリトン人等の間にも行はれ、愛蘭土には第十世紀第十一世紀には其の技術の最高潮に達してゐる。又た西班牙のムアー人の中にも之を作られたのを見るのである。次に我々は眼を轉じて東方諸國に於ける其の分布を調べて見よう。

五

東洋では印度をはじめ中央亞細亞の各地に、矢張り此の技術が頗る古くから存在してゐる。此の亞細亞の寶飾師は希臘の植民地によつて影響せら

れたものであるか、將た彼等と同源から出でたものであるかは、容易に知ることは出來ないが、兎に角古への希臘のそれと同樣の紋樣を保存し、同樣の手法を以て今日迄細工をしてゐること丈けは確かである。サー・ジョーヂ・バードヴッド氏（Sir George Birdwood）は、印度のオリッサ（Orissa）クタック（Cuttacu）などの住民が驚く可き熟練と精巧の域に達した銀製細金細工を以て、其の性質全くアラビヤ、マルタ、諸威、瑞典及び丁抹に傳はつてゐる技術、又古代希臘ビザンチウム・エトルリャのそれと全く相同じもので、恐くはフェニキヤ人及アラビヤ人によつて西方諸國に輸入せられノルマン人によつてスカンヂネビヤに、中世の交易の結果土耳其斯坦に擴がつたものであらうと云ひ、其の根源地は明言して居らないが却つて亞細亞＝印度にあるかの如き口吻を洩してゐる。併し私は直に此の推測に贊成することは出來ないが、

此等東西の技術の間に聯絡の存して居ることは認めざるを得ないのである。（千九百〇三年「デーリ博覽會目錄」に據る。）

印度に於いては此の細金細工――否な寧ろ銀を使用する場合が多いから、細銀細工と云ふ方が宜いかも知れない――の中心は各地にあるが、其の一はクタック（Cuttack）で、最も早くから傳はつてゐるものと思はれる。其他トリキノポリ（Trichinopoly）、ダッカ（Dacca）、ラングーン（Rangoon）、ヂャンシ（Jhansi）、コッタ地方（Kota State）等は其の著しいものである。而して工匠は各地を旅行して、其の行き先き〳〵で、人の需に應じて其家の中庭やヴェランダなどで仕事をする。先づ最初地金を客から受取る時之を計量し、製品が出來上つたら再び之を計つて、たゞ之に對する特殊の勞銀を支拂はれるものもあるとの事である。（大英百科全書に據る）又た此の技術に小さい小兒が用ゐられることは「千九百〇三年デリー博覽會目錄」中の左の記載によつて知ることが出來る。

「學者に取つて興味のある者は細金細工（フィリグリ）に若く技術は無からう。仕事の大部分は小兒によつて行はれるので、銀細工屋の男兒或は徒弟で、八歳十歳以下のものも少くない。彼等の敏捷な指先きと、輕速な視覺は、此の仕事の成功に缺く可からざるものである。親方が材料を用意し、意匠の大體を決める。たゞ最も純粹の銀丈けが用ゐられるのであるが、愈々使用する前には少量の鉛を之に交ぜるのである。之を平たい線に引き伸し、次に之を撚り捩ぢて綱か紐の樣な外觀を與へる。そこで木の葉か花瓣の形をした枠緣を銀で作つて、之を子供等の一人に與へると、彼は銀線を所要の長さに切斷する。此の切つた銀線を一本宛拇指と食指との間に握み、其の一端を半圓形に曲げる。之を件の枠緣の内に突き入れ、其の内側に段々他の線をも篏め込んで一

抔にする。それで之を親方に出すと、彼は金屬接著液を之にたらし、雲母片上に載せて銀線の束と緣とが皆んな接著し了るまで窯中に入れるのである。又た最後に仕上げをやり掃除をし磨きをかけて銀を光らすことは、頗る興味あることであるが、是は多少祕法に屬する。」（三十八頁―九頁）

朝鮮樂浪故地發見帶留

此の面白い記事を外にして、我々は印度に於いて、細金細工が果して何時頃から存在して居つたか、又た其の最も古いものが何時のものであるか等に就いて知ることを得ないのは遺憾である。

六

印度から更に東に進んで支那に於いて此の細金細工が存在してゐるか、何うかと云ふと、我々は現在に於ても此の技術が工匠の間に傳はつてゐると同時に其の精巧な作品の存在することは、ブッシェル氏の「支那美術」第二卷に說かれてある通りである。併し此の近代の技術に至つては西洋から新に輸入せられた

疑を容れる餘地が無いでもないが、彼の關野博士が朝鮮大同江面の漢樂浪の郡治に近い古墳から發掘せられた帶留金具を見るに及んでは少くとも六朝以前或は後漢頃に、支那に於いて「フィリグレー」の精巧なる細工が存在して居つたことを證明して餘りあるのである。是は帶留の尾錠で所謂「銙」と名く可きものであるが、其の長三寸一分五厘、横二寸許りの平たい表面の上に「純金にて母龍一、子龍六を造り出　纖細なる金線及罌粟粒大の金粒を以て、其の表面に細部を作り出せる者にて手法雄健にして而かも精巧無比とも云ふ可き者」と發見者關野氏が云はれた通りで、其の金線は直徑約一厘金粒も殆ど同大で一平方分約五十に達する細かなものである。（關野博士「新に發掘せる樂浪の古墳」考古學雜誌八ノ一）此の龍の意匠は全く支那的であつて、之を製作した者は支那人自身で無くても、支那の土地に於いて、支那人の意匠を以て作られたものに相違無く、我々は支那の本國から離れた遠方の植民地「プロヴィンス」とでも言ふ可き樂浪の土地で、斯る遺物を見るからには、支那本國に於ける帝王貴族等が更にどれ丈け驚く可き技術を示した作品を有して居つたかを想像するに足るものがある。

前圖一部廓大

さて支那に於いて此の「細金細工」は古く如何な

る名稱を以て呼ばれて居つたかと云ふに、私は未だ之に關して充分なる確答を與へることが出來ないが、唐六典には十四種の金の加工が擧げられて居り其の中に鉛金撚金戧金などと云ふものがある恐らくは此等のうちに細金細粒の細工に中るものがあるのでは無からうか。處が茲に細金細工と關係あると思はれる面白い話は符秦の時代に作られた王嘉の「拾遺記」に出てゐる「嗽金烏」の話である。

「明帝卽位二年起靈禽之園(中略)昆明國貢嗽金烏(中略)帝得此烏、畜於靈禽之園、飴以眞珠、飲以龜腦、烏常吐金屑如粟、鑄之可爲器、(中略)此島畏霜雪乃起小屋處之曰辟寒金、臺皆用水精爲戶牖、使內外通光、宮人爭以烏吐之金、用飾釵珮、謂之辟寒金」云々(「述異記」にも此の烏の話が簡單に出てゐる。)

例の「拾遺記」一流の神祕不稽な話であるが、金屑粟の如く、之を以て釵珮を飾るに用ゐたと云ふことは、兎に角此の細金細工に關する知見を豫想したものでなければならないと思ふ。又た同じ「拾遺記」に石季倫の愛婢翔風なるものが、非常な美人で、玉聲を別ち巧に金色を觀ると云ふので、石崇の左右には常に同一の服飾をなさしめた十人の美人を擇んで侍らしめ、翔風が其の美人の珮玉の音と金釵の色とを見別け聞き分けて、玉聲の輕きものを前に居らしめ、金色の艶なるものを後に居らしめたと云ふことが書いてある。而も其の玉珮金釵は、

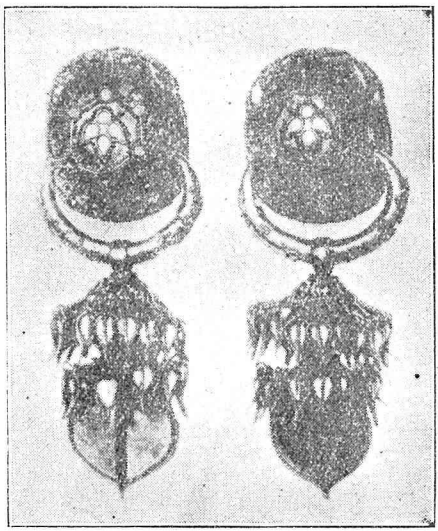
「使翔風調玉以付工人、爲倒龍之珮、縈金爲鳳冠之釵、言刻玉爲倒龍之勢、鑄金釵象鳳皇之冠」。

とあり、此の金を縈して鳳冠の釵を爲ると云ふのも、何となく細金細工の樣に思はれるのである。勿論一般には此の細金細工と他の細かな彫刻とを區別せずして、たゞ金銀彫鏤などの文字のうちに總稱して居つたことは想像せられるのである。

七

我々は又た朝鮮に於いて漢の郡縣以外の土地、殊に古への新羅任那の國の古墳からも、此の細金細工の遺品を發見するのである。而も是は主として耳飾の上に認められる。發見地は慶州附近の古墳、晋洲、昌寧、梁山、星州の古墳などであつて、就中慶州發見品に精巧なものがある。例へば普門里古墳から關野博士や原田學士の發掘せられたのが其の好例であるが（朝鮮古蹟圖譜第三冊同古蹟調査報告等）慶州以外から出たものには粗製品でたゞ細金細工の手法を示してゐる丈けで、線粒の可成太いものも無いではない。又た此の耳飾と同形式同手法のものが、日本の古墳からも往々にして發見せられ、其の分布は九州から四國、近畿、東海、北陸、東山にまで擴がつて已に十數ヶ所に達してゐる。（朝鮮總督府大正七年度古蹟調査報告書參照）その中でも最も顯著なのは肥後玉名郡江田の古墳から出た耳飾であらう。（熊本縣史蹟天然記念物調査報告第一冊）此等に關して私は今ま一々精しい叙述をする遑は無いが此の日本古墳發見品は種々の點からどうしても朝鮮から輸入せられたものと推定せられ、朝鮮のものは或者は朝鮮で作られ、或者は支那から輸入せられたものがあるかも知れ無いと思はれるが、固より一々の實例に於いても之を確言することは出來ない。たゞ私は斯の樣な作品が朝鮮で製作することが出來なかつたと言ふことは云へまいと思ふのである。此の種類の技術は一度他から傳習せられたならば、新しい意匠手法を加へない限り、地方の工匠の手に長く保存して失はれないものである。彼等はブッシエル氏の言の如く「單簡なる器具を使用するに無限の忍耐と敏捷とを以てし」此の面倒な技術を行ふのである。私は昨年慶州に滯在してゐた時、間口二間程の少なやかな店舗を有し細金細工や彫鏤の作品數箇を店頭に飾つて、コ

ツ〳〵と細工をしてゐる老翁を見た。請ぜられるまゝに天井の低い小さい溫突の部屋へ這入つて翁と色々話しを交したが、彼は座右に一人の少年の助手を使つてゐる丈けである。彼は大きな眼鏡を脱づし、鑿の手を止めて細金細工に就いて語つたが、矢張り吹管を以て線粒を接著せしめるので、先年米國の博覽會へも出陳したと自慢をしてゐた。私はこんな陋屋の中で此の老翁と少年の手によつて、店頭に飾つてある樣な精巧な懸垂化粧具（chatelaine）の類が作られることを意外に感じたと同時に、斯う云ふ風な工匠が、斯う云ふ風の製作所で作つたとすれば、新羅の盛時慶州の都であの耳飾の類が作られても何等の不思議は無いとツク〴〵と思ひ込んだのであつた。



朝鮮慶州古墳發見耳飾

八

以上私は細金細工卽ち「フィリグレー」に就いて埃及から希臘エトルリヤ、印度から支那朝鮮に至る廣大なる分布を述べて來つたが、材料の不充分と研究の不徹底とは、或る場合には古代の遺品に就いて記すことが出來ず、或る場合には中間の地方に關して何事も述べることが出來なかつた狀態であるので、從つて此の技術が世界に擴がつた經路と其の根源地をトレースして行くことは甚だ困難であることは云ふ迄も無い。たゞ明かな事實は細金細工が最も古く埃及に存在し、希臘人やエトルスキの手によつて、非

常な發達をなした事と印度其他の東洋諸國にも此の技術が傳はつて居つて、支那では後漢若くは三國時代頃に已に頗る精巧な作品が出來、又た朝鮮では支那六朝に相當する時代に其の遺物を見、同時にそれが日本にも輸入せられたことである。而かも此の「フイリグレー」の如き特殊の技術が此等各地方で自發的に起つたことを信ずるよりも、寧ろ一つの根源から擴がつたものとすることが最も穩當であることを思ふのであつて、希臘の技術が歴山大王の東征と共に印度中亞に傳播し、之が又た漢代以後支那と西域との交通が始まつた結果支那に傳へられ、支那から朝鮮へ這入つたものであらうとの推察は文化交通の大勢から見ても、最も自然な見方であると信ずるのである。希臘技術は勿論東方の影響を蒙つたものであるが、其の東方から直接に絶東に傳つたものとするよりは、一旦希臘へ行つてから、再び東漸したものと私は考へ度いのである。又た斯る技術は工匠その者が一方から他方へ移住することによつて傳播せられるばかりで無く、單に其の作品と技術に關する口傳文けでも、時には擴がることもあるに違ひ無い。何分文献記録に證據を求めることを期待し得ない工藝技術上の事柄である上に、考古學上の資料も未だ不充分であるから、私は今日以上の如き不滿足な記述と漠然たる推測を試みる外ないのを深く遺憾とする。併し世界の文明史特に美術工藝史上に最も興味ある此の問題は、將來益々學者の注意を惹き研究の促進せられんことを希望して已まない。